◉巻末2色刷り特集◉

修験の開祖・役小角伝

不動明王の化身として霊的ネットワークの構築をめざした伝説の行者

——必要なのは不動明王のような力だ。
忿怒の形相で邪と穢れを祓い、
魔障を焼き尽くす力だ——。
日本修験道の開祖とされる役小角の思いは、
まさしくこの一点に集約されていた。
修験道史上でも突出し、異彩を放つ
神通力で、彼は何をしようとしたのか？
また、どのようにしてそれを手にいれたのか。
数々の伝承からその生涯を検証するにつれ、
秘められた壮大な目的が明らかになった！

文＝鴉丸一水　イラストレーション＝丁　絢姫

プロローグ
小角を使った霊界の巨大な再編が霊山の深奥で静かに動きはじめた！

男は神命のまま山に登ってきた

吉野から熊野に至る山岳地帯。その中でも、ひときわ高い山上ヶ岳の頂上に立って下界をながめおろしている、ひとりの精悍な男がいた。

髭や髪を伸ばし放題に伸ばし、荒縄で縛りつけたボロ切れを身にまとってたたずむ男の風貌は、遠目には、世を捨てて山に籠もった隠逸の老人のようにも見えた。

が、近くに寄ってみると、彼が、むだな贅肉の一片もない、みごとに鍛練された肉体の持ち主で、しかも人生で最も脂の乗り切った年代にある男だということが、ただちに見てとれた。

彼がただの隠逸の士でないことは、何よりその異様なまでにぎらつく眼光が雄弁に物語っていた。

そこには、人並みはずれた野心の輝きがあった。また、ありあまる精力、気力の輝きがあった。しかも、一見みすぼらしく見えるその風貌の奥には、名家の出自をうかがわせるにたる気品が漂っていたのである。

問題は、そうした男が、なぜこんな人跡未踏の深山にいるのかという点であった。

この男が活動していた7世紀という時代には、酔狂か、さもなければ世を捨てた隠者でもなければ、山に登ろうというものなどいるはずはなかった。

けれどもその男は、それらのいずれにも当てはまるようには見えなかった。年齢や人品骨柄からいえば、家柄相応の役人として、里なり都なりで働いていて当然のように思われるこの男が、いったい何のために切り立った山上ヶ岳山頂に立っていたのか、そのわけは、当時の人々にはとうてい理解できることではなかったろう。

が、男がこの山に分け入ったのには、確固とした理由があった。数日前、三輪の神が示現して、男にこの山を開くよう命じていたのである。

もちろん、山を開いた先に何があるのか、それが自分の修行といかにかかわってくるのかについては、男は何も知らなかった。

ただ神の命じるままに、男は山上ヶ岳によじ登ってきたのだが、今回の山開きについては、実はまだ当人も自覚していない、大いなる神の仕組みが控えていた。

それは、数千年の歳月をかけて修行を続けてきたこの男を人から神人へと生まれ変わらせ、そのうえで、この男に、日本霊界の大再編を成し遂げさせようという、驚くべき仕組みだったのである。

その骸骨は前世のお前の死骸である

山上ヶ岳の頂上に立って眼下に連なる連山を見下ろし、しばし幽玄の景色を堪能した後、男はまず自分の座所を定めてその場を祓い浄めた。

ついでいつものように孔雀明王や不動明王の呪を唱え、山岳霊界を飛び交っている神霊・聖衆を礼拝して無事ここまでたどりつけたことを感謝した。

新たな修行が始まる――男にはそんな予感があった。その翌日の行の最中のことである。

山上ヶ岳の南側頂上付近で、男は人体の形のままで横たわっている一体の骸骨を発見した。

それはまことに奇妙としかいいようのない骸骨であった。まず最初に彼を驚かせたのは、その巨大さであった。

「なんと、身の丈9尺5寸（約3メートル）はあるか……」

男はつぶやき、まじまじと骸骨をながめまわした。

不思議はもうひとつあった。なぜかわからないが、その骸骨は、左手に金剛杵、右手に利剣を、しっかりと握り締めているのである。

「これらは不動明王の持ち物。本朝（日本）には珍しい霊威の宝具だ。

それがなぜこの苔むした人跡未踏の山中に……」

男はしきりに首をひねった。

が、ふと脳裏に、男が母の胎に宿ったとき、自分の口に金剛杵が飛び込む霊夢を見たという母の言葉が思い浮かんだ。

「いずれにせよ、何らかの因縁があるに違いない。手にとって子細に調べよう」

男は骸骨が握っていた金剛杵を、力いっぱい引っぱった。

ところが金剛杵は、まるで下の岩盤に根を下ろしてでもいるかのように、ピクとも動かない。

膂力では人に負けないと自負していた男ではあったが、ついに根負けして神々の助力を請うた。すると突然、頭上から大音声が響いてきたのである。

「聞け。お前はこの山で生まれ変わること7度であるぞ。そこの骸骨は、お前の第3生（3度目の転生）の遺骸である。この山には、ほかにもお前の前世の遺骸が2体ある。千手の呪を5回、化呪を3回唱えてみよ」

男ははじめ、わが耳を疑った。あるいは山中の魔物のいたずらかとも考えた。

が、先ほどの声に宿っていた神聖な響きは、まがうかたなき神のそれであった。

教えられるがまま、男は一心に千手呪と化呪を唱えた。それから、おのれの第3生といわれる遺骸に近づき、試みに軽く金剛杵を引いてみた。すると、不思議なことに、金剛杵はスッと骸骨の手を離れて男の手に移ったのである。

「オレはこのような巨人であったのか。しかも巨人は手に金剛杵と利剣を握っている。ならばこのオレは、魔を祓い仏を守護する不動明王の化身として輪廻転生を繰り返してきたというのか……」

それはこれまで、ただ憑かれたようにして山岳修行に明け暮れ、その力を何に用いるのかも考えることなく数々の神通力を獲得してきた男の、目覚めの一瞬であった。

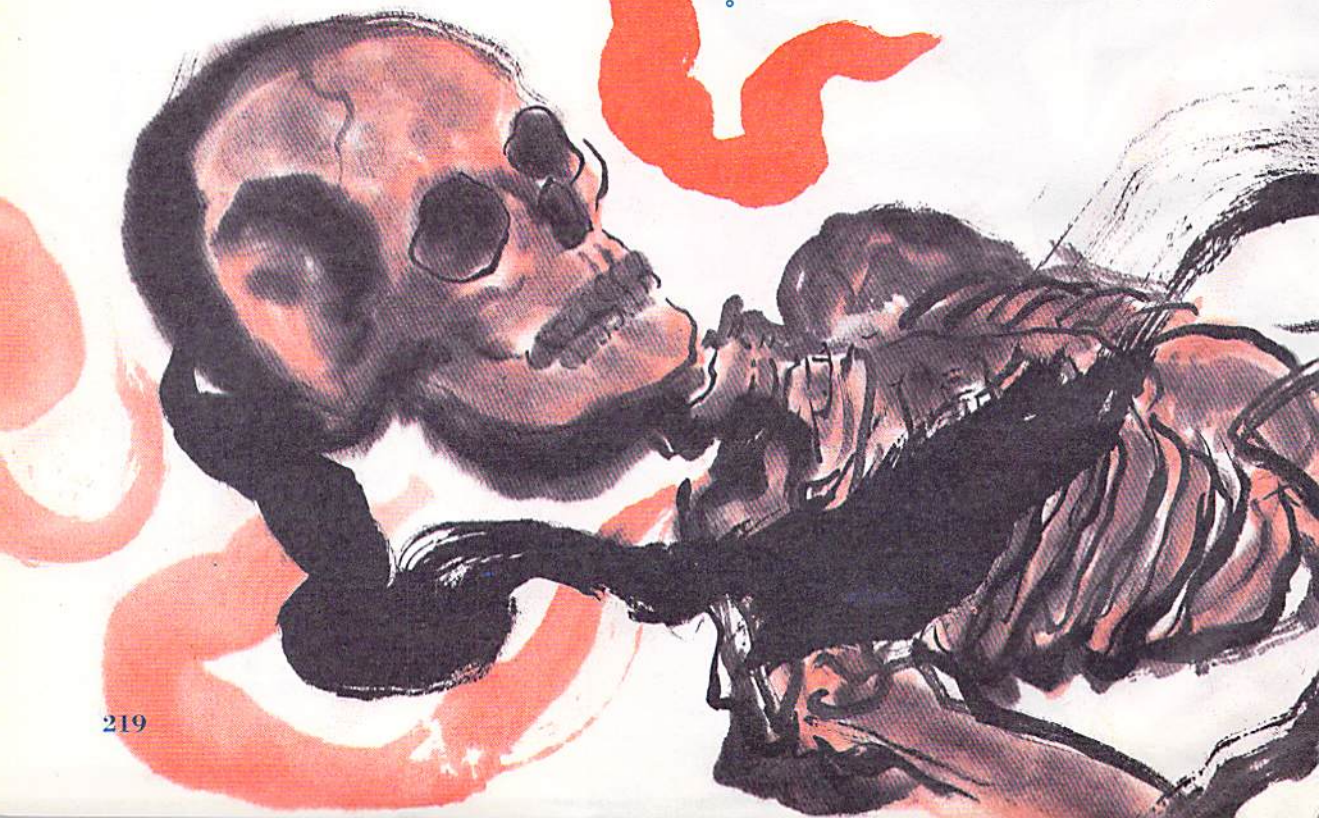
神の言葉に従って、男は山中をくまなく駆け巡り、残りの前世の遺骸を捜した。それらはすべて、神の言葉どおりに大峯山系に眠っていた。

おのれの前世を知ることによって、男は自分のなすべきことを悟った。自分はなぜかくも山に魅かれつづけてきたのか、なぜ神通力を得、なぜ、多数の神仏の加護を得ることができたのか——これらの疑問は一時に氷解した。

そしてこのとき、後に修験道の開祖と仰がれるようになる日本山岳宗教界屈指の神人・役小角が誕生し、また、小角を使った日本霊界の巨大な再編が、深く静かに動きはじめたのである。

⬆役小角。髪や髭を伸ばし放題に伸ばし、ボロ切れを身にまとったその姿で彼は深山に籠もり、何をしようとしていたのか。

⬆大峯山で修行を積む修験者たち。小角が霊山として開き、さらに自らの前世の遺骸を発見した山上ヶ岳はこの山系にある。



第一章 神から直接霊法を学んだ小角の生涯をかけた目的が明らかになる！

一枝の花を握って生まれてきた小角

舒明天皇6年（634）といえば、古代最大の豪族・蘇我氏がまだ権力の絶頂にあったころの時代である。その蘇我氏の勢力圏のひとつである大和国葛木の上の郡茅原村に、この年の正月、賀茂間介麻呂を父、白専女を母として、ひとりの赤子が誕生した。後の役小角である。

➡小角がつかった産湯を汲んだという伝承が伝わる井戸が、彼の生まれ故郷とされる奈良県御所市に残されている。

その赤ん坊は、どうしたことか、一枝の花を握って生まれてきた。しかも泣き声が通常の産児とは異なって何やら大人の言葉のような声を発し、また産屋に奇妙な香りが満ちるなどの不思議があったため、出産に立ち会った人々は大いにいぶかしんだ。

やがて生家の周辺には、あの産児は妖怪か魔物が白専女の腹を借りて世に生まれでた魔性の托胎に違いないという噂がたった。

この噂は、白専女を大いに悩ませた。確かにこのたびの出産は尋常ではなかった。そういえば――と、白専女は懐妊の際に見た奇妙な霊夢を思いだした。

あのとき、空に金色の光り物が現れて私の口に飛び込んできた。あれが何なのかわからないまま今日に至ったが、さてはあれが魔界のものであったかと思うと、白専女の煩悶はいよいよ募った。

後日、白専女は、それが不動明王の独一法身を象徴する降魔の金剛杵（独鈷杵）だと従兄弟の出家から教えられることになるが、この時点では、まだそれがいかなるものなのか彼女は知らない。

口さがない周囲の人々の噂と、自身の不安から、彼女はついに生まれたばかりの赤子を厳冬の荒野に捨て去った。

ところが、この赤子が、なぜか死にもしなければ、野犬に食われることも、烏につつかれることもない。不思議な瑞雲にすっぽりとくるまれた格好で、もう何日も微笑みながら生きつづけているという報告を受けて、白専女は激しい自責の念にかられた。

「あの子を魔のものと思ったのは私の過ち。ひょっとしたらあの子は、祖神の葛木の神が授けてくれた神童なのかもしれない」

こう思うと矢も盾もたまらず、白専女は荒野に走った。

赤ん坊は瑞雲にくるまれて静かな寝息をたてていた。涙にくれながら赤ん坊を抱きかかえると、赤ん坊は無邪気な、それでいて、母が迎えにやってくるのを確信しきった表情で、にっこりと母に微笑みかけた。

こうして小角は、第7生の人生をスタートさせたのである。

幼くして現れた小角の非凡の才

小角の生家の賀茂家は、中央権力に仕える一地方豪族ではあったが、古代から続く名門であり、小角に十分な教育をほどこすだけの資力はあった。

出生に際して数々の不思議を目の当たりにしていた両親は、できるかぎりのことはしてやろうと小角養育に心を砕き、小角もまた、両親の期待に応えてすくすくと育っていった。

小角3歳のとき、養子として賀茂家に入っていた父の間介麻呂が実家の出雲に戻った。そのため小角は、以後母の手で育てられることになったが、そのころから、すでに小角の非凡の才は現れていた。

3歳で文字を書きはじめ、4、5歳のころには、だれに教えられたわけでもないのに、粘土をこねて仏像を作って遊びはじめた。

8歳のころには、だれも見たことのないような不思議な文字を盛んに書いて村人に奇異の目で見られたが、たまたま賀茂家を訪れた僧侶によって、それが梵字であることが知れたといったようなエピソードが、彼の伝記には記されている。

このころから、小角の周囲には常に神仏の働きかけがあった。同年代の子どもと遊ぶことはめったになく、それよりは都に出向いて立派な寺院をながめたり、僧侶の話に耳を傾け、仏像を作り、梵字を書いて遊ぶのを好んだ。

なぜそうするのかは、もちろん小角にはわからなかった。が、内なる声が、彼をそこに導いた。

母はそんな小角を頼もしく思いもし、また心配もした。

こんなに世間に無関心で、果たして賀茂家の跡継ぎとしてやっていけるのだろうかという白専女の悩みは当然だった。

➡小角が生まれたのは、大化の改新のおよそ10年前。権力の絶頂にあった蘇我氏がやがて崩壊を迎える激動の時代前夜である。写真は生誕の場所と伝えられる奈良県御所市の吉祥草寺。

今、大和の地は蘇我の大臣が王家を凌ぐ権勢を誇ってしっかりと掌握してはいる。しかし蘇我氏を快く思っていない勢力はあちこちにある。しっかりと世の中の動きを見定めながら身を処していかないと、家が亡びないとも限らないと、白専女はしきりに気をもんだ。

が、そんな母の心配などどこ吹く風といった様子で、小角は自分が好む学問と遊びに没頭していたのである。

祖霊の眠る山が呼びはじめた！

人生の大きな転機は、小角11歳のときに訪れた。この年、長年にわたって専横の限りをつくしていた蘇我蝦夷・入鹿親子が、中大兄皇子ら反蘇我勢力のクーデターによって打ち滅ぼされたのである。

この大化の改新によって、世間の権力構造はガラリと変わった。蘇我氏を主人としていた茅原の村も荒れ果て、その影響はただちに賀茂家にも及んだ。

多感な少年時代を送っていた小角の目には、大化の改新は、要するに権力者同士の醜い権力闘争としか映らなかった。

「地方の小豪族の命運など、濁流に浮かぶ木の葉でしかない」

このクーデターによって小角が学んだのは、そのことであった。

すでに賀茂家そのものが、過去、何度も権力者によって翻弄されてきている。一族から学んだ家の伝えによれば、賀茂家は葛木の山の神を祀ってこの地に根を下ろしていた古くからの豪族であった。

それが西からやってきた天皇家によって征服され、その配下の葛木氏に組み込まれ、さらに後には蘇我氏の支配を受けて、ようやく命脈を保ってきたのだ。

それが今度の改新で、また別の権力によって支配を受けることになる。そんな薄氷の上を歩むような生活に何の未練があるのか。

祖神と頼む葛木の神には、日々、祈りは欠かしていない。しかし葛木の神も、新たな権力者の前には無力だ。

かといって、仏に帰依すれば道が開けるというものでもない。それなら、仏教を容れるか否かで物部と激しく争ってこれに勝利し、立派な寺を建てて仏教を奨励した蘇我氏が、仏の加護も得られずにかくも無残に焼き滅ぼされるわけはない——と、小角は考えた。

「たんに仏を敬い、たんに神を敬うというだけではだめなのだ。学問を積み、経を習うだけでもだめなのだ。神の道、仏の道はもっとほかにある——」

こう思い定めると、小角の俗世間に対する関心は、以前にもまして冷めていった。と同時に、山岳への関心が急速に膨らみはじめた。山が小角を呼びはじめたのである。

▲▲▲ ついに出奔し、本格修行に入る

伝記は小角が葛木山に登りはじめた年齢を13歳と記している。

葛木山を最初の行場としたのは、そこが賀茂氏の祀ってきた祖神の鎮まる霊山であり、もっとも身近な山だったからでもある。

母の白専女や、日々の暮らしに追われている村人には、小角の所業はまるで理解のできないものであった。

「あいつはいったい何のために夜ごと葛木のお山によじ登っているのじゃろう。生まれたときからおかしな子だったが、やはり何かに憑かれているのだろうか」

村人はこう噂しあい、小角を敬遠した。しかし小角は、そうした声には一切頓着しなかった。

⬅13歳のとき、小角は初めて葛木山に登る。それからというもの、小角はおのれの中に日ごとに満ちてくる霊力をまざまざと実感するようになったという。

葛木の山に登るようになってからというもの、彼はおのれの中に日ごとに満ちてくる霊的な力というものを実感していた。精神はいやがおうにも研ぎ澄まされ、ときには神の声や姿を感じることすらあった。

それが今後の自分にいかなる意味をもつのかなどということを考えている余裕はなかった。

山岳に分け入るようになってからというもの、小角の前には、それまで知らなかったまったく別の世界が開けはじめていた。そしてその世界が語りかけてくる声に全身全霊で向き合うことが、この時点での小角のなすべきことのすべてだったのである。

初めて葛木山に登ってから、4年の歳月が流れた。この間、小角は心配する母をおもんぱかって明け方には家に戻るという生活を守っていたが、17歳になると家を出奔して、ついに山中での捨身修行に入った。

17歳で家を出たのには理由があった。いくら諫めても、泣いて懇願しても葛木登山を止める様子のない小角にしびれを切らせた母が、この年、小角に出家を勧めたからである。

彼女には願行という従兄弟の僧侶がいた。願行は朝鮮の僧から仏教を学んで摂津の四天王寺で修行を積んでいたが、この願行に息子を預ければ息子の生活も改まると、白専女は考えたのである。

けれども小角には、出家の意志などさらになかった。里の寺に籠もって経を習い読み、仏菩薩の供養や祈願を事とする仏教修行を、彼は信じてはいなかった。

それで蘇我が救われたか、あるいは他のだれかが救われたか――小角は母にそう問いたかった。

が、それがいかにも酷なことは、小角にもよくわかっていた。

「やむを得ない、山に籠もろう」

そう決意すると、小角はほとんど着の身着のままの姿で葛木山に入った。

▲▲▲ 菩薩が得た悟りの境地に達す

以後の小角の修行は、壮絶を極めた。もはや明け方までに家に戻らなければならないといった制約もなければ、人目を気にする必要もない。思いのままに山岳を駆け巡り、滝に打たれ、瞑想を深めていけばいいのだ。

藤の皮をはいで作った着衣をまとい、山中の木の実や松葉を食いながら、小角は数年間、ひたすら山に籠もって修行を続けた。

小角伝は、その間、小角に師があったとは述べていない。つまり独修である。

けれども、10代後半から30代に至る間に、小角は道教仙術をマスターし、孔雀明王呪など密教系呪術の数々を完全にわがものにしている。

またその瞑想や幽体離脱の技が達人の境地に達していたことは、小角が雲に乗って自在に飛行し、弥勒菩薩が住む兜率天に遊んだり、竜宮仙冥府に遊んだという伝記の記述からうかがうことができる。

とすれば小角の師は、生身の人間ではなく、神霊・神仙のたぐいだったと考える以外ない。

そうした例は、実際、珍しくない。江戸期の大禅師・白隠は、白幽仙人に長生法を学んだと自著に記しているし、明治の神人・宮地堅磐は大山祇神から数々の神伝を受けている。かの友清歓真も、霊的秘法の数々は神々から直接伝授されたとして、たとえばアメノウズメノミコト直伝の鎮魂帰神法などを書き残しているのである。

小角の修行も、まさにこれであった。地上においては、山岳以上に霊気の澄みわたった場所はほかにない。そこで小角は、存分に肉体を練り直し、心気を練り直して、神々から直に種々の霊法を学んでいったに違いないのである。

「秘密乗を自ら感知して諸尊の瑜伽を皆な空に憶知して自然智を悟る」――行者伝にはこうある。

宇宙万物を司る秘密の大法、過去、幾多の菩薩が得た悟りの境地を、小角は「自ら感知」した。

それは求道者が求めて止まない「自然智」そのものであった。この自然智を開くことによって、小角は霊界とつながり、自在の神通力を発揮できるようになったのである。

が、まだこの時点では、小角は自身の使命には目覚めてはいなかった。

ただ、次のことは明らかに悟っていた。それは、霊界においては日本の神も、中国の神や仙人も、あるいはインドの神も自在に交流しあい、垣根など存在しないという一事である。

山岳で獲得した自然智から見れば、仏教の天部（仏を守護するインドの神々をこう呼ぶ）も、日本の神祇も、根は同じであった。同じように、これは本朝の神伝、あれは仏教呪術、またこれは道教の仙術だといって垣根を設け、優劣を論じるのは、神界・霊界の事情に暗い、なまくら宗教家のたわごとだということが、小角にははっきりとわかっていた。

小角が真の宗教家としての自覚を固めるときは、もう目前に迫っていた――。

➡現在の葛城山中に残る祠。もともとこの山は、小角の祖先、すなわち賀茂氏の祖神が鎮まる霊山だった。この山で小角は凄まじい修行を積むことになったのだ。

第二章 不動明王の化身である役小角の前に ついに金剛蔵王権現が出現！

小角は不動明王の使命を付託された

小角が修行した山は葛木だけではなかった。金剛、熊野、生駒といった山々を小角は次々と開き、そこでさまざまな神や仙人から教えを受けた。

たとえば日本の神には生駒明神や熊野三所権現、三輪明神などがいた。仏菩薩には、十一面観音や竜樹菩薩がおり、仏教天部の帝釈天や弁才天、また眷属神である金剛童子や種々の天竜とも遭遇した。百済の高名な香蔵仙人も、小角に知恵を授けたひとりであった。

こうした神仏・神仙に導かれて修行に明け暮れる山中での小角の日々は、まことに充実したものであった。俗塵にまみれた都への未練は、もとより何ひとつなかった。

たまに山中で出くわした里人から聞く都の乱れた様子に心が痛むことはあったが、そうした思いも、山中の清浄な気に洗われると、たちまち消え去ったのである。

けれども、修行が進むにつれて小角の心に重くのしかかってくるものがあった。

「自分はたしかに、神仙の世界に遊び、弥勒浄土でありがたい仏の真理に接することもできる境涯を得ることができた。できるものならこのまま山中に隠れて遷化したい。が、それで神仏の道にかなうのだろうか」

こうした疑念が沸き起こるたびに、小角は「いや、まだおのれは修行の身だ」と自分にいい聞かせることで疑念を払った。

が、小角の背後で動く神霊は、彼が次の段階に進むことを要求しはじめていた。

そして小角34歳。彼はプロローグで記したように、山上ヶ岳で自分の前世の遺骸と遭遇するという神秘体験をするのである。

この体験が小角にもたらした意味はきわめて重大であった。

体験前の小角は、いかに超人的な能力を誇ろうとも、いわば神仏を渇仰する一個の〝人間〟修行者にすぎなかった。ところが前世の骸骨を見いだして以降の小角は、〝神〟へと意識を変えていったからである。

「あの身の丈9尺5寸に及ぶ遺骸が握っていた金剛杵と利剣は、確かに大聖不動明王の持物。つまりは明王の化身であろう。その化身の遺骸がオレの前世だとすれば、オレ自身が不動明王の化身ということになるのか」

山上ヶ岳における神秘体験以後、小角に取り憑いた疑問はこれであった。

「もしそうであるとするなら、オレには神仏の真理を守護するために世の魔障と穢れを焼き浄めるという大使命があることになる。そういえば……」

と、小角は自問した。

「あのとき前世の遺骸は、オレに金剛杵と利剣を与えてくれた。その意味は、明王としての使命の付託ではなかったか……」

徹底した修行から自らの使命を探る

人間の身でわれを不動明王の化身と考えるのは、あまりに僭越なことと、小角には思われた。やはりあれは魔障の一種だったかもしれないという思いが、脳裏のどこかにこびりついて離れなかった。

それを打ち払い、白黒をはっきりさせるためには、さらに徹底した修行以外にないと、小角は思い定めた。

もし自分がその器であるなら、神仏は重ねてしるしを顕してくれるだろう。それがなければ、気の迷いだったのだ――。

小角の猛烈な修行が再開された。もはや山岳を跋扈して他界に遊び、雲に乗って仙宮や天界を経巡るといった道教の仙人的な修行の日々だけでは、心の満足は得られなかった。

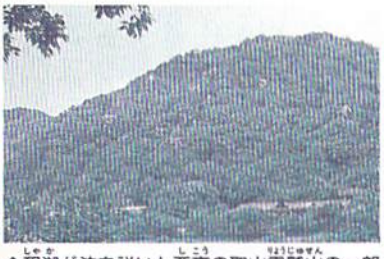
葛木・金剛での修行に続いて、小角は、仙宮が6か所あるとも、釈迦仏が法を説いた至高の聖山であるインドの霊鷲山の一部ともいわれる笠置山を開いた。そして山中の岩屋に籠もり、『法華経』の書写三昧に入ったのである。

それ以前の小角は、経について学ぶより、山河を相手の実践修行を好んでいた。進んで習得した経は、いずれも言霊伝授のための呪経・ダラニのたぐいであった。

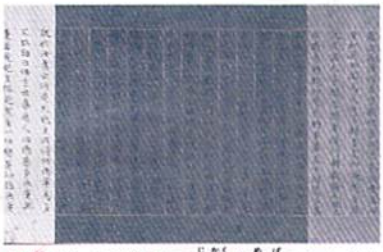
しかし、不動明王の自覚が芽生えると、小角は改めて釈迦の法の神髄に触れる必要を強く感じた。

笠置山は、仏法を日本に受容するに当たって、極めて大きな役割

⬆金剛山、生駒山など、日本でも有数の霊山が鎮座する熊野山系。こうした山々で小角は神や仙人から教えを受けたという。



⬆釈迦が法を説いた至高の聖山霊鷲山の一部であるとされる笠置山。この山中の岩屋に籠もり、小角は法華経の書写三昧に入った。



⬆法華経。不動明王の自覚が芽生えた小角は、改めて釈迦の教えの神髄に触れる必要性を感じたのである。（高野山文化財保存会蔵）

を果たした、かの聖徳太子が、5部の『法華経』を書き写して瑪瑙の石箱に納め、埋納した山とも伝えられる。

その因縁の霊山で『法華経』を学び直し、身は本朝の笠置山に置きながら、魂ははるか天竺の霊鷲山に飛ばして釈迦の説法の末席に連なることによって、小角の不動明王の化身としての自覚は、いよいよ固まっていったのである。

▲▲▲ 混乱をきわめた当時の政治情勢

ここで、小角が不動明王としての自覚を得るに至る30代半ば以降というのが、どのような時代だったのかを見ておく必要がある。

すでに述べたように、小角は、645年の大化の改新からほどなくして13歳で山に入った。

以後、天皇は孝徳、斉明と変わり、改新の立役者である中大兄皇子―天智天皇の治世（661年～）へと移行していったが、この間、小角と俗世間との交渉は、ほとんど切れた状態になっている。

小角が大峯山上ヶ岳で前世の遺骸に遭遇したのは、この天智天皇の6年（667）、34歳のときのことであり、翌天智天皇7年には笠置山に籠もって『法華経』の書写を行っている。

この年、天智天皇は都を近江大津に遷し、その2年後には戸籍作成に着手。さらには法令の制定を図るなど、次々と中央集権化政策を進めたが、671年、志半ばのまま、45歳の若さで崩御した。このとき小角は38歳になっている。

天智天皇の崩御後、日本はふたたび激烈な権力闘争の場になった。国内における百済系、新羅系勢力の暗闘と重なる形で、天智天皇の嫡子である大友皇子と、同天皇の弟である大海人皇子の内戦――世にいう「壬申の乱」が、小角39歳の年（672年）に勃発したのである。

朝廷を二分したこの闘争は、大海人皇子側の勝利に終わった。

皇子は637年、天皇（天武）として即位（このとき小角40歳）。飛鳥浄御原に都を遷し、以後、律令国家としての体制を整えて不動の王権を確立していくのだが、こうした一連の政治の流れの中で、小角は不動明王としての自覚を固め、王権と結びついた仏法とは異なる独自の宗教を打ち立てようとしていたのである。

➡金剛蔵王権現を祀る吉野山蔵王堂。この日本独自の神は小角によって祈りだされ、後に修験道の守護神として日本各地の霊山に祀られるようになった。

強い神を祈りだし日本霊界の統一を

時は流れ、時代は天武天皇へと移った。

威風周囲を払う伽藍も次々と建立され、仏法はひたすら隆盛へとひた走りに走っているように見えたが、小角の目には、それら絢爛たる都の仏法も、ただ権力の走狗のそれとしか映じなかった。

都の仏法のどこに『法華経』の教えが生きているのか。戦乱のたびに焼きだされ、重い課税と飢えと病に苦しみ、道に迷いつづけている民衆を救うことは、官僧にはとうていできない——この思いは、すでに小角の信念と化していた。

「必要なのは不動明王のような力だ。怒りの形相で邪と穢れを祓い、魔障を焼き尽くす力だ」

小角の修行は、次第にこの一点に集約されていった。

戦のたびに、人々はさまざまな神仏に加護と必勝を祈願してきた。

が、実はそれこそが世の乱れを生みだす元凶になっていると、小角には思われた。

「おのれの利害によって神仏を使役し、利に反すれば簡単に法を捨てるのが当今の仏教だ。今や絶対的な権力を誇っている天皇にしても、壬申の乱以前には、天智天皇への帰順を誓って俗を捨て、吉野に出家した身ではないか。それが、再び俗世間に戻って多数の配下の血を代償に王位を奪い取った。みながみな神仏に助けを求めるが、それはつまるところ、欲のため以外の何物でもない——」

小角の目には、俗世間の乱れの背後に暗躍する鬼神の姿がはっきりと見えていた。そしてそれを打ち破るには、何より絶対的な力が必要だった。

「強い神、真の仏法外護の神を祈りだし、その神を軸に据えて、日本霊界の大統一を図らなければならない」

この大願を胸に、小角は再び山上ヶ岳に登った。

そこは金剛杵と利剣を握った自らの遺骸と出会った因縁の場所であった。この聖なる山で、小角はいまだ世界のどこにも出現したことのない絶対的な力の神を顕現させようとしていた。

時に天武天皇3年(674)、小角41歳のことである。

←小角が金剛蔵王権現を祈りだした際の様子を記した絵巻物。いくつもの激しい神試しのあと、ついに小角はこの神に出会ったのである。(『役行者絵巻』武藤家蔵)

小角の祈りにより神界が動きだす!

小角が大峯山上ヶ岳に入ってから、早くも半年の歳月が流れていた。小角の捨身の難行は休むことなく続けられ、彼が唱える孔雀明王呪や不動明王呪は、連日、深山にこだました。

山岳を駆け巡るとき、小角は風になった。念を込めるとき、小角は火になった。山頂の巨岩に座して定に入るとき、小角は空になった。今や小角は、それ自身が自然そのものとなり、宇宙そのものとなりつつあった。

その意識の中で、小角は一心に至上の武侠神の顕現を祈願した。そして秋も深まりはじめたある夜、神界が、いよいよ小角の祈りに応えて動きだしたのである。

一心に呪を唱える小角の前に、オーロラのような光にくるまれながらまず最初に示現したのは、しかしいかめしい武侠神ではなく、優美きわまりない弁才天であった。

いかに優れた験力をもつ神とはいえ、破邪顕正の神としては、弁才天はあまりにも端麗すぎた。

そこで小角は、この神を守護神とすることを辞退した。

これはひとつの

話題沸騰の宗教ハンドブック・シリーズ

Books Esoterica —8

11月中旬発売
定価1000円(税込)

修験道の本

神と仏が融合する山界曼荼羅

待望の最新刊、ついに登場!

日本人にとって山とは何だったのか?
山の霊力に感応し、霊験なる呪力を獲得した役小角の実像ほか、修験道のすべてを網羅!!

◎峻険なる山々を駆け巡り、霊力を得た修験者たち(能除、泰澄、聖宝、浄蔵、食行身禄、林実利など)
◎九字、憑り加持、鬼神使役法などの秘密行法とは
◎霊気漂う深山幽谷で行われる死と再生の秘儀の謎
◎鞍馬天狗はじめ天狗小僧寅吉まで主要天狗列伝
◎大峯山、御岳山、出羽三山など完全霊峰ガイド
◎山界曼荼羅から金胎曼荼羅まで神仏習合の美術
◎深山を舞台にした呪術宗教・修験道の歴史と系譜
そのほか、多彩な記事や写真を満載
(詳しい内容は本誌目次前の折込み広告をご覧下さい)

学研 NEW SIGHT MOOK

神試しであった。もしこのとき、小角が妖艶な弁才天の色香に迷って迎え入れたなら、その時点で小角の大業は潰えていただろう。

小角が辞退したので、弁才天は大峯のふもと、天河の里へと下っていった。これが後の天河弁財天になる。

次いで示現したのは、地蔵菩薩であった。しかし地蔵は慈悲の菩薩であり、その円満な相好は、やはり降魔の軍神としては不適格であった。

そこで小角は、この菩薩もつっしんで辞退した。地蔵菩薩は弁才天とは反対方向の阿古谷方面に飛び去った。

小角は、さらに強く念を込めながら、呪を唱えた。

すると、にわかに山頂に突き刺さるような雷鳴と稲光が起こり、同時に大峯が崩れ去るほどの大震動が一帯を襲った。

↑役行者像。修験の開祖とされるだけに、小角の像は、今も日本各地の霊山に残されている。(石馬寺蔵)

そして地獄の業火も、かほどすさまじくはあるまいと思われる火炎の中から、牙をむきだし、3つの眼球をいっぱいに見開いた、怒怒の形相もすさまじい魁偉の武侠神が、忽然として現れたのである。

「これぞまさしくわが神！」

小角はただちにこの神を受け入れ、礼拝した。顕現した神の高く掲げられた右手には、まさしく因縁の金剛杵がしっかりと握り締められ、腰に当てられた左手の指には、堅く剣印が結ばれていた。

小角はその御姿を、ただちに脳裏に刻み込んだ。

その後、小角が、この神といかなる交渉をもち、いかなる冥約を結んだかについては、何ひとつ記録がない。けれども、このとき神界の深秘に属することからについての神託が下されたことは、おそらく間違いないであろう。

どれほどの時が経ったのだろうか。ふと気づくと、その神の姿はすでに闇の中に掻き消えていた。

ありありと脳裏に刻み込まれたその神の威容を写すべく、小角はただちに座所としていた湧出岩を離れて森に入り、手頃なシャクナゲの木に御姿を彫りつけた。

こうして祈りだされた神こそ、後に全国各地の霊山に勧請され、修験道の守護神として崇められるようになった金剛蔵王権現だったのである。

この金剛蔵王権現は、仏典には存在しない日本独自の垂迹神とされる。

なぜ小角は、毘沙門天をはじめとする四天王天や摩利支天、各種明王などの名だたる天部武侠神を招かずに、小角以前にはだれひとりとして知ることのなかった蔵王権現なる神を祈りだしたのか。

その理由は、おそらく次のようなものであったろう。すなわち、小角の目指す霊界再編という大業を守護するには、すでに都の寺院のそこかしこに祀られ、特定の権力によって〝護国の神〟として縛られている天部の分霊（神本体ではなくその分身）では、役に立たなかったからなのである——。

第三章 謀略による伊豆への配流にも動ぜず 霊的ネットワークの構築をめざす！

霊山を結び合う山岳結社を結成

蔵王権現を祈りだして以後、小角の活動はにわかに活発化した。

当時、葛木や金剛の山岳には、権力に奉仕することに汲々としている都の仏教に幻滅した僧侶や、半僧半俗の修行者たち（優婆塞）が、ぽつぽつ出入りしはじめていたが、小角はそれらの者の中から使えそうな者を選びだし、ひそかに道を伝えはじめた。

➡中央が小角で、左右につきそっているのが前鬼・後鬼である。この鬼は、小角が法力をもって退治して以来、弟子になったとされているのだが…。（武藤家蔵）

さらに小角は、かつて西からやってきた天皇勢力と戦って敗れ、山に隠れて独自の生活を営んでいた土着の民――山人とも結びはじめた。

各地に残る小角像には、前鬼・後鬼という2匹の鬼が、常に付き従っている。この前鬼・後鬼は、現在の奈良と大阪の間にある生駒山中に潜んで里人を食うと恐れられていたが、小角が法力をもって退治して以降、小角の弟子となったと伝えられている。

しかしその実体は、鬼などという異形のものではない。生駒の地は神武天皇が東征してきた折り、激しくこれと敵対したナガスネヒコが支配していた土地であった。

その土地に住んでいた多くの民は、やがて天皇家の支配体制に組み込まれて西の民と同化していったが、それを快しとしない一部の人々は、王権から逃れて山中に隠れた。

その子孫が、いわゆる山人なのであり、もともと反朝廷の側に立つ彼らを、里人や時の権力者が鬼と呼んでさげすみ恐れたまでのことなのである。

こうした山人がいたのは、何も生駒だけではなかった。葛木にも、吉野にも、熊野にも、山人はいた。「古事記」などが「クズ」「土蜘蛛」と呼んで蔑視している土着民は、いずれも山に隠れて山人となっていた者たちである。

小角はそれら山人とひそかに手を結び――これが後に前鬼・後鬼伝説へと姿を変える――、山岳と山岳を結ぶ一種の結社を組織しはじめていったのである。

金剛蔵王権現を全国の霊山に勧請

小角にはさらにもうひとつの重要な活動があった。各地霊山を経巡り、山岳ネットワークをつくりだすとともに、祈りだした金剛蔵王権現を各地の霊山に勧請するという仕事がそれであった。

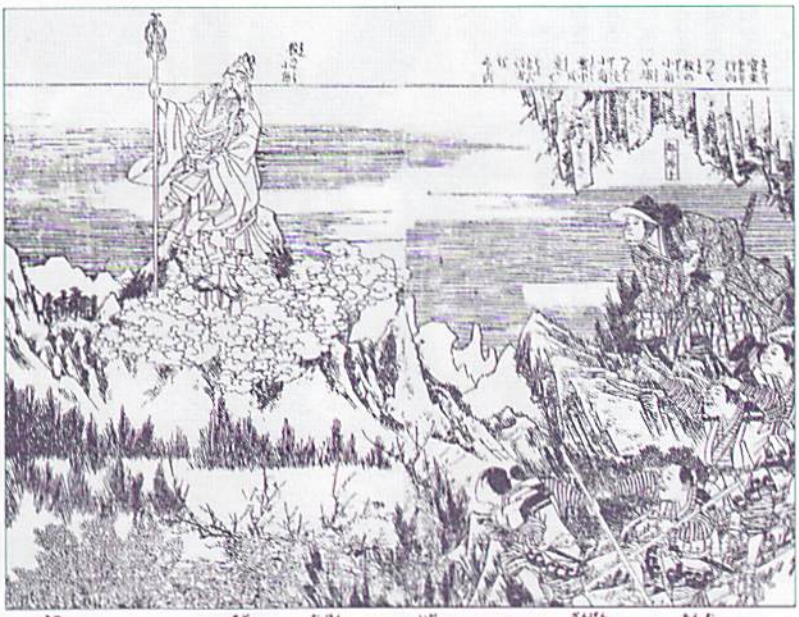
東北では羽黒山・月山・鳥海山の出羽三山、北陸では立山や白山、関東では日光山に赤城山、九州では英彦山などといったように、今日、小角が訪れたと伝えられる山は日本各地にある。

小角が、当時、それらの霊山のすべてを実地に巡ったかどうかはわからない。が、小角と手を結んだ者が、それらの山岳に霊的拠点をたてていったということは考えられる。

実際、小角の死後、密教と結んで修験道を形成した山岳宗教家たちはそれを行った。そしてそのひな型をつくりだしたのは、まぎれもなく役小角その人だったのである。

霊的拠点と拠点を結ぶ山岳ネットワークづくりという仕事は、小角が「葛木山と金剛山を結ぶ石の橋を架けた」という伝説によって、今日に伝えられている。

が、実際に山と山を架け渡す橋



⬆「怪しの術を用いて民を惑わし、謀反の意思を抱いている」との讒言により、文武天皇は小角の捕縛を決意する。図は今まさに役人に捕えられようとする役小角。

などつくれるものではないし、その意味もない。が、橋を、独立した霊山・霊域を結んで蔵王権現の結界とする仕事を象徴的に表したものと読めば、その意味はただちに明らかになる。

そして「その際、小角が大いに鬼神を使役した」という伝承は、先にも述べたとおり、すでに手を結んでいた山人、優婆塞らの協力のもとに行ったことを物語る。

また「この石橋づくりの最中に、小角の指示に異論を唱えた一言主神を蔓で霊縛して谷に捨てた」という伝承は、個々の山岳をおのれ一個の霊域として保持しようとする古い神々を、蔵王権現の威力によって支配していったことの象徴表現にほかならないのである。

謀略によって伊豆へ配流される

こうして着々と山岳ネットワークを整備し、蔵王権現の結界を拡大していくと同時に、小角は、民衆との接触も開始した。

葛木山中に不思議の術を使う行者がいるという噂は、かなり早くから伝わっていたが、修行に明け暮れていた時代の小角は、つとめて彼らとの接触を避けるようにしていた。

しかし蔵王権現感得後の小角は、病に苦しんだり日照りに悩む民衆のために積極的に呪術的治病を行い、請雨に威力のある孔雀明王呪を唱えて雨を降らすなどの奇跡を次々と顕していったのである。

行者は雨に当たっても濡れない、自在に空を飛び、鬼神をあやつり、雨を支配するなどといった評判がたち、その噂は、たちまち畿内一帯に広まった。

こうした小角の活動は、時の権力者を著しく刺激した。

天皇は天武からその妻・持統、そして嫡子の文武へと移っていたが、その文武天皇のころには、小角の存在はだれもが知るところとなっていた。

朝廷は小角一派の内情を探るべく、呪術的医療の術（呪禁道）をもって国家に仕えていた役人の韓国連広足を送り込んだ。

広足は小角の弟子となってその懐に入り込み、さかんに秘密を探ろうとしたが、広足の思惑をとうに見抜いていた小角は、しっぽをつかまれるような言質も与えなければ、謀反を暗示するような行動も、何ひとつとらなかった。

業を煮やした広足は、ついに何の証拠もつかめないまま、「小角は怪しの術を用いて民を惑わし、謀反の意思を抱いている」と朝廷に讒言したのである。

広足のこの讒言は、正式な国家の歴史の記録である『続日本紀』にも記載されている。

こうして小角は、今日でいう国家反逆罪を企てるところの重大犯罪人と見なされるに至った。

小角を逮捕すべく、文武天皇は何度となく捕縛の役人を派遣した。しかし、獣道から何から山岳のすべてに精通している小角を逮捕することなど、都の役人にできようはずもなかった。

そこで朝廷は、まだ存命していた小角の母の白専女を人質に小角を捕縛するという作戦に出た。

この作戦は功を奏した。やむなく縛についた小角は、文武天皇3

年（699）、ついに伊豆大島に流罪と決まったのである。

▲▲▲ 天帝の意思により赦免が行われた！

以後、小角の活動は東国に移る。島流しとはいっても、もはや神人の域に達している小角にとっては、距離の遠近は関係がなかった。

日中はおとなしく刑に服しつつ、小角は夜になると自在に飛行して富士山に登り、また関東の霊山を巡っては、蔵王権現の勧請、結界の拡大をはかっていった。

一方、都では、小角を伊豆に流した後、なぜか各地に異常気象などが頻発しだした。

また、神憑りした巫覡のたぐいが、「小角を死刑にしないと都が滅ぶ、大和が滅ぶ」と触れ回る騒ぎもあった。

そこで文武天皇4年（700）、朝廷は改めて小角に死刑の判決を下し、役人を伊豆に送ったが、役人が小角を斬ろうとすると、刀身に富士明神の秘文が浮かび上がり、小角に向かって振り降ろすと同時に刀が3つに割れて飛び散るという不思議が起こった。

涼しい顔で裁きの場に座っている小角を残して、役人はほうほうの体で都に逃げ帰り、事の子細を報告した。

人々は小角の神通力に驚くとともに、自分たちが何かとんでもない過ちを犯したのではないかという不安にとりつかれた。

「捕縛の際、小角は天皇に謀反の意思はないと明言していたし、広足の訴えにも証拠はない。小角と結んでいるといわれた葛木、金剛の優婆塞らを調べても謀反の証拠は上がらなかったし、小角の係累である伊予の越智氏についても同様であった。遠流は間違いだったのではないか。むしろ小角は官僧として国家に取り込み、一寺を与えて管理したほうが良策であったのではないか……」

朝廷内には、こんな声までささやかれはじめた。そんな折り、文武天皇の夢に、神の使いの童子が現れたのである。

北斗星の精の化身を名乗る童子は、天皇に向かってこう告げた。

「あなたは聖人を罪に陥れた。その過ちが、今日の災異を引き起こしている――」

天皇の驚きには、ひとかたならないものがあった。北斗は天界一切を司る天帝の使いであり、その天帝は、天皇が最も大切に齋き祀らなければならないと信じられた万神の主神であった。

その天帝の使いの童子がこういうからには、それが天帝の意思であることは疑いようがなかった。

天皇はただちに小角の赦免を決定した。

かくして罪を解かれた小角は、大宝元年（701）、3年ぶりに故郷の土を踏んだ。時に小角67歳の晩冬のことであった。

⬇小角によって開かれたという伝承もしくは小角の足跡が残る日本各地の霊山。こうして見ると、小角が築こうとした霊的ネットワークの姿が見えてくる。

写真提供＝学研資料室／本田不二雄

エピローグ
独自の神霊ネットワーク完成をめざし役小角はいまだに活動を続けている

小角は本当に昇天したのか？

伊豆から戻って以降の小角の消息については、ほとんど何の伝承記録も残されていない。

伝記類によれば、小角はただちに母のもとを訪れ、ついで、若き日に修行を積んだ箕面の滝元や熊野などに詣で、また大峯などを巡って先祖の供養を行った。それから、前鬼・後鬼らの弟子たちに暇を告げた後、その年の6月7日、母を乗せた鉄鉢を片手に雲に乗り、静かに昇天したといい、また、九州に移り、そこから唐に渡ったともいうのである。

修験道では、この大宝元年6月7日を役小角の命日としている。

が、あれほど強靭な肉体と神通力を誇った小角が、許されて故郷に戻ったとたんに帰幽したとは考えにくい。

また、日本の霊界を独自の神霊ネットワークによってひとつに結び上げるという大業の途中で唐に渡ったというのも不自然である。

とすれば、考えられる可能性はひとつのように思われる。それは小角が、再び山中奥深くに籠もり、今度はまったくの秘密裡に山岳ネットワークづくりと山岳結社づくりを進めたのではないかという可能性である。

小角が姿を隠した大宝元年は、日本が天皇一元の律令体制を完成させた年でもある。この年に完成した『大宝律令』によって、日本は完全に天皇の国家となり、国家は天皇そのものとなった。

国教としての仏教も天皇のための仏教、護国の仏教としての地位を確立し、小角の思い描いていた仏教からは完全に隔絶したものとなっていったのである。

役小角は今もなお生きつづけている

この状況は神仏の国家管理が完成したことを意味している。実際、僧侶は国家試験を受けて合格したもののみに与えられる資格だったから、仏門に入ることは、宗教的な役人になることと何ら変わりはなかった。

こうした時代は、小角の求めている時代ではなかった。それゆえ彼は、伊豆から戻るとただちに山中に籠もったのではなかったか。

小角が目指していたのは、鎮護国家の仏教でもなければ、王権のために祈る神道でもなかった。

彼は仏教だの神道だの、あるいは道教、陰陽道だのといった間仕切りのない、生きた神霊の活動する生きた宗教を打ち立てようとした。

その象徴が、インドにも中国にもない金剛蔵王権現だったのであり、この権現を中心に各地の霊山を結んで一大山岳結界を引き結び、表の日本国とは遮断されたもうひとつの日本、いわば闇のネットワークによって統一された日本を現出させようとしていたのではないかと、筆者には思われてならないのである。

この原稿では、諸種の小角伝をつなぎあわせて、ひとつの統一的な小角像を描きだした。しかし、最後にお断りしておきたいのは、こうした小角伝が、実は飛鳥時代に実在した役小角という超人の上に、何らかの理由で山岳に入りこまざるを得なかった人々全体の怨念や希望、意思、霊的使命といったものを重ね合わせる形で成立してきたという点である。

つまり役小角という人物は、実在の個人であると同時に、修験道全体の霊的象徴ともいうべき存在として機能してきたのであり、その文脈からいえば、彼は今も霊的巨人として生命を保ち、霊山に憑かれた者の魂を呼び寄せつづけているのである。

⬆『神変大菩薩尊像』における役行者像(中央)。霊山に魅かれ、魂を揺さぶられる者がいる限り、決して小角は死ぬことはない。(聖護院蔵)

➡今日も山岳に入り、厳しい修行に励む修験者。役小角の残した足跡はとてつもなく大きく、その伝統は彼らの中に脈々と受け継がれている。

※本文では煩瑣になるので省略したが、これを書くに当たっては、『役行者本記(宗祖本記)』を中心に、『役君形生記』『役行者顕末秘蔵記』『役公徴業録』(いずれも『日本大蔵経・修験道章疏三』)などを参照した。また銭谷武平『役行者ものがたり』、大三輪天愚『神変大菩薩』にも多くを負った。記して感謝します(魏丸)。